

講座の参加 ありがとうございます。

『万葉集』を読む

5月に新元号が「令和」と決定しました。

「令和」は、『万葉集』に掲載されている和歌の序文から引用されたものです。

図書館では、5月18日(土)に岐阜聖徳学園大学教育学部の大石真由香先生を講師にお迎えし、『万葉集』を読み解く講座を開催しました。

多くの市民の方にご参加いただきました。



ふるさと古文書講座

清水進先生の「ふるさと古文書講座」が今年度も始まりました。毎年定員オーバーになるほどの人気の講座です。

3月までの全10回と長い期間ですが、古文書のくずし字を読み解きながら、大垣の歴史をじっくり学んでくださいね。



大垣に伝わるむかしばなし ③⑦

『大垣べっぴん』

「サツサ見てくれ 大垣の水で磨いた玉の肌
ソレ玉の肌」

大垣音頭の一節は、「大垣べっぴん」を賛美さんびしたもので、清らかな水で知られた大垣には、美人が多かったようです。中京美人の美しさは北陸美人の艶(あでやかさ)を備え、自慢の水で磨きあげたのですから「水も滴したる美人」とは、これを言ったものです。

大垣のべっぴんを紹介しましょう。

紅蘭(こうらん)は、牛屋川の上流に生まれ、梨の花咲く里で育った清純な姿をたたえられ、十七歳で星巖(せいがん)夫人となり、激動(げきどう)の世に夫を支えました。

江馬細香(えまこ)は、藩医蘭齋(らんさい)の長女として生まれ、才色兼備の女性でした。頼山陽(らいさんよう)との師弟愛、京への旅立ちなど、劇的(げきてき)なドラマとして、語りつがれています。

戸田大栄院は、十代藩主氏彬(うじあきらの)妻として令名をうたわれ、藩主の亡きあと、大垣別邸で書や歌の道で後輩の指導にあたり「だいえんさん」の愛称で、優美さをたたえられています。

十一代藩主氏共(うじとも)の妻、戸田極子(きよくこ)は、伯爵外交官夫人としての教養美をたたえられ、鹿鳴館では日本一の名花として咲き誇りました。

出典

『大垣むかし話100話』大垣市企画広報課・編
『大垣むかし話100話』は大垣市電子図書館でも読むことができます。

